《研究ノート》

世界を横切って人民戦線（二）

平田好成

『ペレストロイカは、経済だけでなく、社会生活のあらゆる面、社会関係、政治体制、精神、思想分野、党とすべてのわが幹部の活動スタイルなどあらゆるものを包括している言葉だ。私はペレストロイカという言葉と革命という言葉の間にイコール符号をつけたい』

ゴルバチョフ書記長、ハバロフスク演説、一九八六年。

三

第三の論文は、クローディオ＝ナトリ Claudio NATOLI（イタリア共産党員研究者）『G＝ディミトロフにあってファシズムの分析と反戦闘争』である。論文は、五〇年振りで、回想されている。

ディミトロフによって着手された政治的作成の仕事は、国際的状況の危険な重大化と一緒に、中欧でナチの膨張の亡霊とヨーロッパでフランスの軍事的ヘゲモニーについて集中させた安全保障の体系の衰退と一緒に、ヒトラーの帝国主義に直面した西欧諸強国は連れて行った、譲歩と黙認の政策と一緒に、統一の骨組を形成した、これらの諸事件によってはっきりとマークされた。諸事件は、たとえ共和制のスペインと連帯の行動においてであろうと、人民戦線諸政府の消耗と一緒に、そして、諸社会党の全翼によって表現された、拒否に引き続いて起きる、社会主義労働者インタナショナルの政治

的麻痺と一緒に、コミンテルンと統一戦線に参加するように密接に絡み合った。最も知覚し得るデータは、それによって、社会主義の方へ前進の独創的な戦略の研究の放棄、そして、一九三六年でほの見えた、民主主義と社会主義の間の諸関係について考察の放棄であった。ディミトロフは、反ファシズム闘争が、ますます現行諸制度と一体をなすことを目指した、もっと伝統的な解釈について後退した。解釈は、古典的なブルジョワ＝民主主義的な段階の中で記録された、すべての完全な視点において、そして、ファシスト諸制度によって奴隷化で脅やかされた、諸国の独立を防衛することに用意のできた全諸勢力に可能な諸同盟（アリアンス）の分野を広げた、国民戦線の展望の中に置かれた。そのように、一九三七年から、ディミトロフは、もしもあらゆる犠牲を払って諸政府の内部の結集力を維持するように必要性を強調するため、外国に仕えて親ファシストの諸勢力に反対してエネルギーシュな諸措置の採択を要求するため、そして、人民戦線に割り当てるようにすべての軽い気持を拒絶するため、最も広範な反ファシズム統一に反対して進むであろう、それは、意義がないならば、公に人民戦線諸政府の具体的な政策について介入するように避けた。すなわち、『スペイン人民は、と、ディミトロフは、一九三七年の初めに書いた、スペイン人民が立ち向かう義務がある、著しい試練にもかかわらず、そして、スペイン人民が克服する義務がある、困難にもかかわらず、勝利に向かって確実な歩調で歩く……。この勝利の保証、それは、何よりも先ず人民戦線であり、闘争の中に創られた、そして、辛い試練を掛けられた、この比類のない武器である。共産党員たち、しかし、スペインの人民戦線の他の諸政党と諸組織は、内部から用心を分けるように試みながら、敵の諸指令を従う、すべての人々に関して、最も大きな用心を表明しながら、この武器について注意深く見守る、武器を補強する、武器を改良する、ますます有効に自分で取る必要があるということを、ますます理解する。』（『一九三七年の初めに』、国際的通信（コミンテルン）、一九三七年一月九日。）

これらの分派に反対する闘争は、一つならずの、『トロツキー主義』に反対する闘争と一緒にその時振舞わなかった。トロツキー主義の中に、人々は、『スパイたちの一味』、気晴らしの代理人たちの一味、『ドイツ＝ファシズムと日本の軍

隊の派閥に仕えて』警察の教唆者たちの一味を少しも見えなかった。その唯一の目的は、ソ連邦でソヴィエトの権力に反対してサボタージュを組織することであったし、『分裂を強調する、そして、労働運動の統一を抑制すること』であったし、『人民戦線運動を内部から崩壊させる』ことであった。（『当時の最高の要求、労働者階級の統一』、コミンテルン、一九三七年五月八日。）『ソ連邦でファシズムのテロリストの代理人たち』に反対する訴訟は、そのこと自体で、『国際的労働者階級の反ファシズム闘争の欠くべからざる部分』になった。これらの訴訟に反対した、すべての人々が、単に『世界の労働者階級の統一された運動に打撃を』もたらすことはできたし、『スペインで、フランスで、そして、他の諸国の中で、反ファシズムの労働者たちの統一戦線』を妨害することはできた。人々は、諸共産党が、『諸共産党の階級的用心』を示す、『友人たちを隠された敵たちから区別するのを教える、階級的敵の二重の代理人たちを仮面を剝ぐ、代理人たちを、時間通りにそして無慈悲に、プロレタリアの諸組織の地位から追放する』ことを、諸共産党から期待した。（「ファシズムの保護の下に悲惨なテロリストたちを選ぶこと、それは、ファシズムを援助することである」、コミンテルン、一九三六年八月二九日。）

そのように、重要な日に、『二つの陣営がただ反対しているであろう、一つの陣営から離れていることは、確実に他の陣営に接近するのと同じことになった、多様化ではなかった、しかし、分極化であった、両極端の集中への分派が、無情な時期の支配的な分派であったことを、希望した、』この『壊滅的な単純化』は、戻って来た。（E=フィシャー E. Fischer、思い出及び反省、ローマ、一九七三年、四五八―四五九頁（仏訳、大きな社会党の空想、ドゥノエル、一九七四年）。『大訴訟』のためにディミトロフによって引き受けられた態度について、同書、四三二―四三九頁、参照。ブルガリア共産党について諸結果に関して、N=オレン N. Oren、ブルガリアの共産主義。権力への道一九三四―一九四四年、ニューヨーク=ロンドン、一九七一年、八三―一〇〇頁、参照。）広々とした諸同盟の建設の上に、そして、多様な起源の諸勢力の共同行動の上に建てられた、いずれにせよ、人民戦線政策の本質自体を反駁した、一つの単純化である。

そのような背景の中で、ずっと前進した社会政治的な諸目標の事前の定義と同時に、下部の諸機関で配置しようとする、

そして、人民戦線に大衆の参加を価値を高めようとする、情報は、ディミトロフの考察から消滅した。新しい型の民主主義共和国のスローガンに関して、ディミトロフは、暗黙の中に別にして放ったらかして置いた。そして、この背景の中で、人民戦線は、諸党の同盟の側面を選び取った。それは、政治制度的な活動の場に限定された、上部の集中を重要視した。その『政策の優位性』のようなものということになった。それは、諸階級関係の中で移動のすべての展望の、そして、社会のすべての全体の変化の反ファシズム闘争を孤立させるのを目指した。ディミトロフは、『反ファシズムと反戦人民戦線政策の中に社会参加しながら、共同敵に反対して労働者たちの他の諸党と諸組織と一緒に統一された諸行動を組織しながら、労働者たちに統一された諸行動を組織しながら、労働者たちの重大な諸利害のため、そして、労働者たちの民主主義的な諸権利のため、平和と自由のため闘いながら、共産党員たちが、資本主義の革命的転覆の歴史的必要性を見失わない』ことを強調したことは、真実である。ディミトロフは、この闘争の中で、共産党員たちが、『マルクス主義者たち、首尾一貫したプロレタリア革命家たち』として行動したし、『ブルジョワ民主主義者たちあるいは社会改良主義者たちとして』行動しなかったし、そして、人々が、『当時の緊急な諸目標の実現を労働者階級の諸展望と戦う諸目的の間の断絶』を、容認できないものとして、保持しなければならなかったということを、付け加えた。(『労働者階級の統一……』、引用。)しかし、これらの原則的断言は、新しいイデオロギー的硬化の徴候としてむしろ響きわたった。人々が、そこで偶然の効果を見ることはできることなしに、原則的諸断言は、新しい諸方式によって、民主主義と社会主義の間の関係を再定義するようにすべての企ての放棄と同時に起こった。二つの用語は、これとは逆に、抽象的関係によって分離されたそして連結された、二つの歴史的段階の輪郭を再び引き受けし始めた。すなわち、一方では、『マルクス主義に対する宣伝及びマルクスの、エンゲルスの、レーニンのとスターリンの大きな原理の同一視を横切って、労働運動の枠の理論的レヴェルの上昇』、すなわち、他方では、ソ連邦に対する無条件な忠実さ及びスターリン制度によって提供された多様な局面に対する『社会主義のモデル』。『ディミトロフが、書いた、国際的プロレタリアートの統一の実現における抜きん出た役割を演

じる、勝者の社会主義の国は、ソ連邦の周りに労働者の立場のあらゆる誠実な支持者たちを集め直すであろう。現在の国際的状況の中で、誰が友人たちであるか、そして、誰が労働者の立場の及び社会主義の敵たちであるか、すなわち、誰が支持者たちであるか、そして、誰が民主主義の及び平和の敵対者たちであるか、ということを決定するため、ソ同盟に対して態度よりももっと堅固な規準でできなかったであろう。試金石は、労働運動の各ミリタンの善意及び正直さを確認するように可能にする、そして、各労働者党の善意及び正直さは、社会主義の大国に関して善意及び正直さの態度である。もしも人々が、この闘争の本質的な城壁、すなわち、ソ同盟をあらゆる手段によって補強するのに貢献しないならば、人々は、現実にファシズムを戦うことはできない。人々は、全面的に、世界の平和の保護の主要な扇動者、ソ連邦を支持（しないで）、新しい世界の大量虐殺のファシスト扇動者たちに反対して誠実に闘争することはできない。もしも人々が、社会主義はその労働者たちの英雄的な努力のお陰で実現される、このソヴィエト国家の敵たちは反対して身を起こさないならば、人々は、実際にその固有な国の中で社会主義のため闘争することはできない。もしも人々が、その敵たち、すなわち、ファシズムのトロツキー主義者―ブハーリン派の代理人たちを非難しないならば、人々は、ソ連邦の真実の友のため持ち堪えられることはできない。（一九八八年二月五日夜、ソ連共産党政治局特別委員会は、ブハーリンらの法的な面で名誉回復を決めた。）

実際には、一方ではファシズムの、戦争の及び資本主義の諸勢力と、他方では、平和の、民主主義の及び社会主義の諸勢力の間、歴史的境界線を決定する問題、それは、ソ同盟に直面する態度である。そして、一般的に言って、ソヴィエト権力と社会主義に関して純粋な形態の態度は、問題ではない。すなわち、重要である問題、それは、敵に反対してソ同盟の疲れを知らない闘争と一緒に、労働者階級のソ同盟の独裁とソ同盟のスターリン憲法と一緒に、レーニンとスターリンの党のソ同盟の指導する役割と一緒に、実際に二〇年の終わりに現存する、このソ同盟に関する態度である。』（同上。問題は、第七回大会でディミトロフによって非常に違ったやり方で取り組まれた。それは、その時ソ連邦に直面する態度ではなかった。

しかし、それは、社会民主主義の左翼と右翼の間の境界線を描くため、目立たせた、統一戦線に関するむしろ態度であった。）

移り変わりのあらゆるテーマ体系は、この背景の中に、ソ連邦の及び人々が社会主義の建設の大成功として指示した問題の賞賛に地位を残すため、離れて置かれた。大成功は、『国際的労働者階級の立場』を補強したし、『彼らの固有な解放のための闘争の中に数百万の労働者たち』を持ち上げたし、『プロレタリアートの周りにしっかり都市と農村の労働者たち』を集めた。すなわち、労働者たちは、『ファシズムと戦争に反対して、諸人民の間の民主主義と平和のための統一戦線を考慮して、熱狂の闘争に対してあらゆる反ファシズムの諸勢力』を指導した。（G＝ディミトロフ、『ソ同盟と資本主義諸国の労働者階級』、コミンテルン、一九三七年一一月一三日。）労働者たちは、『単に経済的レヴェルについてばかりでなく、生活と文化の諸条件の、科学と技術の場についても、資本主義的体系について社会主義的体系の優先性』の証明を構成した。（反ファシズムと反戦闘争の人民戦線。）そして、最後に、労働者たちは、世界的レヴェルにおいて証明の決定的な勝利の保証であった。それは、このイデオロギー的な、典型的にスターリン主義の母胎の中で、実は、二〇年以上の間、共産主義運動の大きな特徴の一つである義務があった、この『二重人格』は、挿入されるであろう。戦略と戦術の間のますます鋭敏な相違の表現、対内及び対外のソヴィエトの政策と世界における革命の諸形態の多様性の間の矛盾の徴候、ソ連邦と一緒に関係は、ミリタンたちの環境と広大な組織網の意識と精神傾向（心性）の中で、当時の政治的必要性と社会主義の最後の窮極目的の間の本質的な団結の特徴になろうとしていた。最後の審議中、その関係は、諸共産党の革命的性格の保証であった。

労働運動の内に諸共産党の組織と影響力の強化は、この枠内に、それ自体として目的の機能を引き受けたし、強化は、―それは、すでに、第二インタナショナルの『正統的な』マルクス主義の中でケースであったように―、出合いの点とすぐれて戦略と戦術の調停となった。そして、共産及び社会諸党の間の共同行動が、客観的に反ファシズム闘争の防衛的時期に限られるのを目指した間に、労働運動の内に分裂から望まれた整理は、ますます少なく新しい統一された綜合の建設

として、そして、ますます多く社会民主主義の危機の機械的結果として、自己紹介した。整理は、共産党の政綱に対して大衆の加盟の結果として生じたし、コミンテルンの中で、左翼の社会党諸組織の吸収の結果として生じたし、そして、すべてのそれは、『二つの道』の間の超厳しい対決の基盤について結果として生じた。

『社会主義への移行の、この平和移行の代わりに、そして、社会民主主義が約束された、苦痛なしに、社会民主主義は、そのあらゆる降伏と分裂の政策によって、ファシズムへの道を開いた……。帝国主義戦争の終わりに、前例のない革命的危機の諸条件の中で、社会民主主義の反動的指導者たちは、労働者階級を二つに分割した。すなわち、その指導者たちは、イデオロギー的に及び政治的に労働者階級を武器を取り上げた。すなわち、その指導者たちは、進行状態のプロレタリア諸革命の発展をブレーキを掛けた。すなわち、その指導者たちは、従って、ファシズムの悪い打撃に対して労働者たちをさらす、資本主義の支配を保持した。この時期の間、ボルシェヴィズム、この事実そのままのマルクス主義は、労働者階級を集めた、労働者たちと農民たちの破壊できない同盟を実現した、資本主義を無に帰させた、社会主義革命の勝利を保証した、そして、どうにか地球の六分の一について社会主義社会を建設し遂げた。

スターリン同志は、数年前に、千回も書くのは正しかった。すなわち、『先ず第一に、労働運動の内に社会民主主義social-démoratisme と一緒に結着を付けないで、資本主義と一緒に結着を付けることは可能ではない……。』これらの二〇年の間、そして、世界経済恐慌の間、資本主義諸国の勤労大衆は、多くの試練と苦悩を耐えた、そして、勤労大衆の苦痛を与える経験は、勤労大衆を多くの事態を学んだ。一方では、決定的な及びソ連邦で社会主義の可能な後ろに復帰なしの勝利、他方では、ファシズムが、とりわけドイツで課した、一時の敗北の諸教訓は、単に労働者階級の中でばかりでなく、諸社会党の政治的指導部の下で見出された、労働組合たちの中で同様に、諸社会党それ自体の内部にも、社会民主主義の影響力を倒した。社会民主主義の陣営において、ある人々は、社会改良主義の諸態度、ブルジョワジーと一緒に階級的協調の政策を放棄し始めた。そして、ファシズムに反対して諸共産党と一緒に共同闘争の諸態度について職を得始めた……。

ソ連邦で社会主義の勝利は鍛えた影響力と一緒に、人民戦線運動の発展と一緒に、労働運動の内部に共産党の影響力の増大と一緒に、人々は、疑いもなく、破産の社会民主主義を放棄するであろう、諸共産党と同意して、階級的共同敵に反対する闘争を導くであろう、そして、プロレタリアートの独特な及び大衆的党の内に共産党員たちと一緒に団結に対して進むであろう、諸社会党と社会党の諸組織の数を増加することを検討しよう。（『ソ同盟と労働者階級……』、引用。ディミトロフの論文の否定的な反響は、期待させなかった。とりわけ、論文は、フランス共産党とフランス社会党の間、組織的統一について諸交渉の中断の始まりであった。フランス社会党の態度である問題のため、『フランスで社会党員たちと共産党員たち』、資料と議論（今後I. I.、国際的情報誌に追加）、一九三七年一二月一日、参照。）

人民戦線政策のより進んだ発展に対して道を開くどころか、連合（ブロック）としてソヴィエト＝モデルの独特な性格の要求は、民主主義の防衛と社会主義のための闘争の間、継続の解決の考えを批准した。それは、単に、直接の時期の『妥協の精神』と権力の獲得及び社会的管理の変更できない図式に対してイデオロギー的な賛同の間に、振動することを余儀なくさせた、諸共産党の主導権に対して息から取り除くことはできた。もしも人々が、革命的過程の不平等な発展と国民的特殊性、すなわち、資本主義的体系の中で進行中の変化を考慮に入れたならば、しかるに、この図式は、労働運動が置かれた。—そして、西洋でばかりでない（この背景の中で、反日闘争のやり方で貢献した、しかし、国民党に関して同様にソ連邦に関して、その自治を元のままに維持した、中国共産党の経験は、すべて特に興味深い。従って、中国共産党は、国民戦線政策を、農村の動員、社会的変化の諸過程及び農村における民衆の自主管理の諸機関の飛躍と結合した。それは、解放の諸闘争においてその固有なヘゲモニーを建てるように可能にした。E＝マシ E. Masi と L＝フォア L. Foa、一〇月に続いて、ミラノ、一九七七年、一七四—一九二頁の貢献と同様に、A＝ナトリ、『毛沢東及び中国共産党（一九二一—一九三五年）の〝ボルシェヴィキ化〟、東の風の方に、四五—四六号、一九七七年、参照。）—、新しい目的を理解するよう可能にしなかった。あらゆるこれらのテーマについて、社会主義に対して前進の独創的な形態として、人民戦線を思い付くことを狙う、ディミトロフの研究は、単にスターリンの『大恐怖政治』の最

も暗い紆余曲折の中で、一九三七―一九三八年で、ますます身動きできなくさせた。(一)

他方、ディミトロフの考察は、第七回大会以後、重要な富裕化を知った、主要点である。すなわち、それは、ファシスト諸国によって占領された、国際的地位の分析及び平和のための闘争のひどく複雑な戦略の定義であった。この活動の場について、人々が、人民戦線についてすでに越こした分析の中で、人々は、動揺を位置を突き止めないであろう。逆に、三つの一九三六―三七―三八年をざっと目を通す、そして、ミュンヘン協定によって印象づけられた、精神的なショックを与える転換点を越えて追い掛け合うように思われる、方向の決定の堅い継続性は、はっきりするように思われる。人々は、すでに、エチオピア戦争の時に、ディミトロフによって引き受けられた、当時コミンテルンの内で支配的な方向の決定よりももっと開かれた、諸態度を注目した。しかし、ディミトロフが、大きな明晰で及び内容の大きな豊富さで、平和のための闘争のテーマ体系を取り戻すことはできたという、それは、一九三六年の間であった。すでに、一九三六年三月二三日のコミンテルン幹部会の会期の時、ディミトロフは、同時にイタリア及びドイツ＝ファシズムによって発展された、攻撃の及び教唆の政策に反対して共産主義運動によって導かれた、活動の批判的な総括を描くことは躊躇しなかった。

『われわれは、われわれが、アビシニアでイタリア戦争に反対して、多少とも重大なキャンペーンを発展させる状態でなかったということを、確証しなければならない。コミンテルン第七回大会以降、統一戦線戦術の適用について及び反戦闘争について、われわれの決議以降、プロレタリアートは、戦争の道について、イタリア＝ファシズムの最初の重大な攻勢に反発することはできなかった。この仕事は、異常な弱さで留まっていた。

今日なお、ドイツ＝ファシズムの教唆と一緒に、戦争への直接の準備の展望の中で置かれる、そして、ヨーロッパで直接の戦争の危険を異常に増大する、ヒトラーの最近の行動と一緒に、人々は、必要な対立及び大衆の必要な動員によって記録しないということを、言う必要がある……。諸社会民主党の政策について、それらの政策が、実際、一九一四年まで過ぎ去った、問題を再現する気になっていることを、われわれを説明することは足りない。われわれは、知っている、す

なわち、第二インタナショナルの諸党の軸に沿った態度は、諸党の固有なブルジョワジーの諸利害に結び付けられる、そして、戦争に直面して諸党の態度は、単にそれぞれの諸党の支配的階級の態度であるかも知れない。しかし、それは、われわれが、ヒトラーの側の破廉恥な教唆に反対して、プロレタリアートを動員する状態にはない……ことは、事実を説明することに足りない。私の意見によれば、各共産党のレヴェルで同様にコミンテルンのレヴェルで、そして、それを自己批判を恐れないで、われわれにあっては進行しないであろう、問題を、われわれを救出する必要がある。次のことにまじめに熟考することは、私を必要なように思われる。すなわち、反戦キャンペーンの受動性の及び弱い発展の本質的な諸原因の一つは、重要な各国にとって及び国際的なレヴェルについて、われわれが、大衆を動員するためそれで必要であるように、具体的な諸スローガンを念入りに作り上げるのに到達していなかったことは、実際には、その基礎を置かなかっただろうか。諸原因の一つは、実際には、われわれが、幾人にあるいは小さな前衛に話し掛けられなかったであろう、しかし、数百万の人間の大衆に話し掛けられたであろう、諸スローガンを実践するように可能性を見分けるのに成功しなかったことを、その基礎を置かなかっただろうか。われわれは、労働運動の経験のお陰で、もしも勤労大衆が、どこに勤労大衆は進行するか、なぜ勤労大衆は諸スローガンで及びはっきりした展望で配置するか、ということを知っているならば、そして、もしも勤労大衆が、人々は、目標を到達することはできるということを完全に納得されているならば、決定的なやり方で、闘争に入ることを、知っている。しかし、もしもこの確信が欠けているならば、行動は、半分についてはあるいは四分の三については麻痺される。』

そして、人々が、『プロレタリアートの国際的行動なしで』及び統一された政治的政綱なしで、『戦争に反対して闘争すること』ができたということを、強調した後、ディミトロフは、結論した。すなわち、

『われわれは、第七回大会で一般的なスローガンを定義した。そして、エルコリ同志の報告において……、われわれは、正しく基本的な諸問題を表明した。しかし、われわれは、それ以上に進行しなければならない。われわれは、この進め方

を具体化しなければならない。大会の予想の基礎について、われわれは、戦争に反対する現実の闘争で採択された、具体的な政綱を念入りで作り上げねばならない。われわれは、この闘争を繰り広げるため、国際的政策は具体的に導かれなければならない、様式を定義しなければならない。そして、われわれは、諸社会民主党、諸労働組合、あらゆる国の大衆的諸組織に対して、この具体的な政綱で顔出しする義務がある。われわれは、人民大衆を指導するようにできる、諸社会民主党の革命的左翼を始動させるのに貢献することはできる、そして、階級的敵に反対するその闘争の中で、労働者階級の行動のための活動の場を救出することはできる、具体的な政綱、すなわち、プロレタリアートの国際的政策を強く勧めねばならない。』（ディミトロフの介入は、『統一と人民戦線政策の上にギェオルギィ=ディミトロフ Georgi Dimitroff（一九三五―一九三七年）』、労働運動の層の方に激怒から（BZGA）、三号、一九七二年、の中で見出される。）

諸文書の資料に行き着くような不可能性は、われわれを、コミンテルン幹部会の内に討論の展開を知っていることを許さない。しかし、一カ月後、ディミトロフは、コミンテルンの理論的雑誌の中で、彼が率直に差し迫った必要性を断言した、反戦闘争のこの『具体的な政綱』の大きな諸路線を跡づけた。ディミトロフは、事実に反して、警戒することで始めた。すなわち、

『一九一四年以降なお決して、世界大戦の脅威は、同様に大きくならなかった。そして、その時まで決して、全人類を脅やかす、破局を避けるため、全諸勢力を動員するような必要性は、同様に緊急なものではなかった。』

『戦争の扇動者たちの諸国家』、ヨーロッパでナチ=ドイツ、極東で日本のように定義された、諸国家の外交政策の非常に明晰な分析は、結果として生じた。すなわち、

『近づく戦争は、単にソ同盟を脅やかす、あるいはとにかく、最前線にソ同盟を脅やかすことを信じるというのは間違いであろう。ヒトラーの軍隊によってラインランドの占領は、フランス、ベルギー及び他のヨーロッパ諸国に対して直接の脅威を創り出すことは、明白ではないか。それは、等しく、近い将来のためのヒトラーの征服の諸計画は、ドイツ人民

の隣りの諸国家の征服を狙う、事実である。

もしもヒトラーが、今日〝ドイツについて主権〟で話すならば、彼は、明日、〝全ドイツ人たちについて主権〟で話すであろう。このスローガンと一緒に、彼は、オーストリアを併合し、独立国家としてチェコスロヴァキアを破壊し、アルザス＝ロレーヌ、ダンツィヒ、デンマークの南の部分、メメル、等を占領することを試みるであろう。そして、それは、完全に理解される。すなわち、ドイツ＝ファシズムにとって、単にソヴィエトの強力な国に反対して次いで戦争を行うため、〝全ドイツ人たちの国民的統一〟で要求されながら、隣りの諸領土を征服するために軍隊を派遣することで始まるようにもっと容易である。ライン川について補強される、ドイツ＝ファシズムは、たとえポーランドの現実の統治者たちが、ドイツ＝ファシズムで、同盟の諸関係を維持するにしても、同じやり方で、ポーランド人民の独立に対して脅威を構成する。

極東に関して、たとえ日本の軍事的及びファシスト的国政を牛耳る一味徒党が、ソ同盟に反対する戦争を準備するとしても、そして、その一味徒党が、かかる可能性を目標にして、ベルリンと仲良くしたけれども、最も直接的な打撃は、中国人民に反対してもたらしたであろう、事実について何の疑いもない。日本は、すでに満州を占領したし、相次いで中国の諸地方を現在奪い取る。日本帝国主義は、このやり方で、フィリピン及びオーストラリアを奪い取るように、全アジア人民、インドを含めて、服従しようと努める。日本帝国主義は、アメリカ合衆国及び大英帝国と決定的な清算について、自らを準備する。』（G＝ディミトロフ、『平和のための闘争の統一戦線』、コミンテルン、一九三六年五月。しかし、庇護の下に、ディミトロフの分析において、エチオピアでイタリア＝ファシズムの侵略及び国際的勢力諸関係についてその不安定化の諸結果は、残っている。この意味で、ラインランドの再武装化の後、最大限に『平和戦線』に対してイタリア政府を引っ張るように努力した、ソヴィエト外交の方向の決定は、享受した。この選択は、一九三六年のイタリア共産党によって進められた『国民的和解』の政策に必ず影響をもたらした。）

しかし、ディミトロフの諸態度の利害は、採点は最もよく見抜いたけれども、これらの幾らかの採点に限られない。実際、『諸帝国主義戦争の主要な原因が、資本主義その自体において、その併合主義的諸希望に在る』ということを強調しながら、ディミトロフは、『今日の具体的情勢の中で、近づく戦争の扇動者が、ファシズム、帝国主義の最も好戦的な諸勢力のこの鋼鉄の握り拳である』という、事実に反対して警戒する。ディミトロフは、『その固有な国の人民大衆に反対して内部の戦争によって、その支配を保証した』後に、特にドイツ＝ファシズムが、『世界のあらゆる国々に対する直接な戦争の脅威』となったことを、付け加える。もしも人々が、三月初めに、彼がR＝ホワードR. Howardに与えたインタヴューの中で、スターリンによって表明された大きな慎重さで基づくならば（インタヴューのテキストは、コミンテルンの中にある、一九三六年三月。）、そして、もしも人々が、一九三六年の最初の数カ月の中で、ナチ＝ドイツと諸関係の改良を手に入れるため、ソヴィエト政府で繰り返された『交渉の開始』に考えるならば（一九三六年一月一〇日の執行委員会でモロトフの報告、『国際的状況、戦争の増大する脅威及びわれわれの政策』、コミンテルン、一九三六年一月、V＝M＝モロトフ、『M＝シャストネM. Chastenetとインタヴュー』、コミンテルン、一九三六年三月二八日と同様に、参照。ウランUlam及びベロッフBeloffの古典的な諸著作を除いて、独ソ諸関係について、J＝B＝デュロゼール、一九二三年から一九三九年まで独ソ諸関係、パリの中で、J＝グリュヌヴァルドJ. Grunewald、『一九三三年から一九三六年まで独ソ諸関係の進展』すなわち、G＝L＝ヴァインバーグG. L. Weinberg、ヒトラー＝ドイツの外交政策、すなわち、一九三三―一九三六年、ヨーロッパで外交革命、シカゴ及びロンドン、一九七〇年、七四―八一、一八〇―一八二、二二〇―二二三、三一一―三一三頁、すなわち、D＝S＝マック＝ミュリD. S. Mac Murry、ドイツとソ同盟、一九三三―一九三六年、キェルン＝ヴィーン、一九七九年、参照、同様に、Th＝ヴァインガルトナーTh. Weingartner、スターリンとヒトラーの昇進。ソ同盟とコミンテルンのドイツ政策、一九二九―一九三四年、ベルリン、一九七〇年、一九七―二七四頁、参照。）、そこで、最も重要な正確さで問題があった。ディミトロフが、『戦争の所謂不可避性及び平和の維持の不可能性に関する運命論の考え』、すなわち、競争する諸帝国主義の間、基礎について『等距離』の考えは照応した、考えに反対して、引っ張って行った、

論争は、意味をはっきり示すと同様に示した。この論争は、イギリス独立労働党ＩＬＰによって主張されたテーゼに反対して引っ張って行かれた。しかし、この論争は、単にコミンテルンで確認された方向の諸決定の勇敢な修正への誘いとして、そして、第七回大会で起こった、曖昧さと矛盾自体を解決するのにアピールとして、互いに尊敬し合うことができた。

ディミトロフの議論の中心に、現在の状況と一九一四年の状況を分けた、根本的な差違について固執は、見出されたし、新しい世界大戦が引き受けるのに当てられた、もはや帝国主義的ではなく、しかし、反ファシズムの性格の暗に含まれる承認は、見出された。ソ連邦と『果断なファシスト侵略者たち』の存在、『ファシスト侵略者たちの側の及び国家と国民として、それらの独立の喪失の侵略の直接的な脅威の下に見出された、多数の国々』の存在及び『一定の時期に、平和の維持によって関心を惹かれる、他の資本主義諸国の』存在、あらゆるこれらの現実は、『侵略者たちとして今後あらゆる国家を代表する』ことを、すべての誘惑を失格させた。それらの現実は、前よりもっと、『ファシスト侵略者に対して攻撃を……集中させる、侵略者に関する態度と彼の侵略の犠牲者たちに関する態度を区分するように』、そして、『ファシスト諸国家と非ファシスト諸国家の間の相違を弱めるのを狙うすべての企て』を告発するように必要とした。結果として、侵略によって脅やかされた諸国において、労働者階級は、国民的防衛と外交政策の諸問題に関して、無関心であることを示すことはできなかった。労働者階級は、逆に、『ファシスト奴隷化に反対してその固有な人民とその固有な国の』防衛の見地から立っていながら、『労働者たちと農民たちの民主主義的諸権利の拡張』と『それらの重大な利害の保護』を要求しながら、その固有な政策を拡げねばならなかった。その理由は、各国の政治的制度の民主化だけ、そのファシスト構成員たちと他の反動的なスポークスマンの軍隊の純化だけ、そして、勤労大衆の諸要求の満足だけは、『ファシスト侵略に反対して人民の防衛』を保証することはできた。諸共産党に送付された招待を、たとえこれらの措置が、現職のブルジョワ諸政府によって提案されたとしても、脅やかされた国々の防衛の及び一般市民の住民の保護の正確なすべての手段

を支えることに入手できると示しながら、この綱領の活用を保証するようにただ能力のある、人民戦線諸政府の形成に対して働くから生じた。そして、そこでなお、ヨーロッパで起こり得るファシスト侵略に反対して、国民的防衛政策の領域において、この交渉の開始の態度によって、人々は、共産主義運動に新しい主導権の分野を開いた、その上丈夫な闘争においてそのあらゆる重要さを選び取るだろう、捕らえるべき政治的合図を読むことはできた。

この背景において、国際的プロレタリアートの中心の目標は、『時間通りに、平和の維持のための諸人民の闘争を組織する、そして、……ファシスト戦争の扇動者たちと彼らの従僕たちに反対して闘争を集中させながら、日常的にこの闘争を導くこと』であった。この目的に対して、必要として、労働者階級、農民たち、知識人たちと他の労働者たちばかりでなく、独立が脅やかされた、そして、『真の戒厳令へ戦争の扇動者たち』を追い詰めたであろう、諸国民と諸人民も、理解したであろう、平和の統一戦線の形成は、是非必要であった。ディミトロフは、この点について、すぐ前の数カ月の中で表現された、コミンテルンの諸態度と一線を画した、国際連盟が、この分野において、少しでも国際連盟が、侵略者たちに反対して制裁の政治的形態を採択したとすれば、決定的な役割を演じることはできたということを、付け加えた。すなわち、

『人々は、制裁の適用が、戦争の危険を増大する危険を冒すであろうということを、言う。それは、真実ではない。それは、逆に、戦争の危険を増大する、侵略者の罰せられぬことである。人々は、断固としてファシスト侵略者に反対して、経済的及び財政的レヴェルの制裁を適用するであろう程ますます多く（信用の全体的な拒否、商業諸関係及び原料の諸供給の中断）、そして、少なくドイツ＝ファシズムは、戦争を解き放つように羨望を感じるであろう。

人々は、無慈悲に、それらのためらい、その受動性、その無分別のため、国際連盟を批判しなければならない。労働者階級は、利己主義の諸利害の諸動機のため、侵略者を援助し、平和の維持のため取られた措置を妨害し、下層階級の諸利害を犠牲にする……、国際連盟のメンバーたち、帝国主義諸国家の諸政府に反対して強硬な闘争を導く。しかし、人々は、

国際連盟に敵対する態度を採択する必要がある……、その結果を保持することはできない。それは、戦争の主要な扇動者たちであり、もっと正確に、国際連盟を去った、ドイツと日本である。

そして、それは、その国際的比重と一緒に、平和と集団安全保障の立場と国際連盟の陣営の中でそれを防衛する、ソ同盟である。ファシスト侵略者たちを他の諸人民で攻撃させることは願わない、他の諸国家は、その一部をなす。かつての国際連盟と今日の国際連盟の間、差違を作ることはできない者、圧力について及びその諸政府が、平和の維持を考慮して措置を取るため、色々な資本主義的諸政府について、大衆的圧力を行使するのに放棄する者、そういう人間は、ぺてん師であり、革命家ではない……。

労働者階級は、平和の維持（不可侵協定、侵略者に反対する相互援助協定、集団安全保障協定、経済的及び財政的制裁）を目指す、国際連盟及び諸国家の措置を主張しなければならない。労働者階級は、戦争に反対する強力な大衆的運動によって、国際連盟に及び多様な資本主義的国家の諸政府に、平和の防衛のため、重大な措置を取るために、単に主張するばかりでなく、義務を負わせるべきである。

戦争のファシスト扇動者たちによって引き合いに出された口実の前に、永続的な譲歩の政策は、平和の維持に使う、その政策は、国際連盟もしくは色々な国家から生じることを言うのは、正しくない。労働者たちは、……それは、ドイツでファシズムへの権力の道を開いた、ファシスト攻勢の前に、妥協と降伏の精神であったということは、忘れていなかった。国際的舞台について、同じ降伏の政策は、好戦的ファシズムに対して、その攻勢を広げるため、自由な分野を残す。[二]』

ディミトロフにとって、『ファシスト独裁に反対してその戦いの中心に、盲目的愛国心のデマゴギーの告発と戦争の準備の告発を記入しながら』、ファシスト諸国それ自体の労働者階級は、『ファシズムが、人民を倒させることを願った、破局を避けるため、全諸勢力を』団結させることはできることは、重要であった。それを作りながら、労働者階級は、『単にその固有な保護でばかりでなく、平和の諸利害を考慮して、全人民のため、全体の人類のため』働いた。平和の人民戦

線の発展を認めるため、成功裡に好戦的なファシズムに反対して闘争を指導するため、ディミトロフは、その骨格と『原動力』を構成しなければならなかった、プロレタリアートの行動統一において本質的な条件を置いた。彼は、社会主義労働者インタナショナルと国際的労働組合連合ＦＳＩの内に多数派で確認された、統一戦線に対して一所懸命に反対の路線を批判した、しかし、同時に、これらの組織の中で、『平和の維持の利害において、労働者階級の統一させた政策』に賛成する強力な運動の存在を強調した。そして、ディミトロフは、結論した。すなわち、

『平和の維持は、ファシズムのための致命的な危険である。その理由は、その内部の諸困難を強調しながら、平和の維持は、ブルジョワジーのファシスト独裁を根元を掘り崩すのを目指す。平和の維持は、プロレタリアートの諸勢力、革命の諸勢力の発展を優遇する、平和の維持は、労働運動の陣営の中で分裂の追い越しを促進する。平和の維持は、資本主義に反対する全労働者たちの闘争の中で、プロレタリアートを指導階級になることを援助する。すなわち、平和の維持は、資本主義的制度の基礎を徐々に崩す。すなわち、平和の維持は、社会主義の勝利を促進する。』（あらゆるこれらの引用のため、『平和のための闘争の統一戦線』、引用書、参照。）

そのように、ディミトロフは、初めて、たとえ非常に簡潔明瞭なやり方であろうと、『違った、すなわち、戦争が、革命のため必要な移行であるように思われた。仮設に反対された、仮設』を描いた。そして、……ディミトロフは、逆に、政治的綱領の言い回しで提起された、『平和のための闘争』と『社会主義のための闘争』の間に、緊密な関連の展望を提示した。（G＝プロカッティ G. Procacci、『第二次世界大戦の前日に国際的社会主義の〝講和のために闘争〟』、マルクス主義史の中で、三、二巻、テュリン、一九八一年、五八六頁。）

ディミトロフの態度は、コミンテルンの指導グループの共同の方向の決定を反映しなかった、しかし、ディミトロフの態度は、その結果が、不確実に留まった、地下の議論で欠くべからざる部分となったことは、ほとんど確信している。引き続いた数カ月において、ディミトロフの公の調停は、コミンテルンの政策の深い変更を考慮して、だからと言って、そ

の約束を無くならないで、完全に話を中断するまで間が空いた。一九三六年六月二六日、コミンテルン書記局の集会に対して、ディミトロフは、一九一四年八月一日の記念日を伴った、反戦闘争の伝統的な日を組織するのを断念するよう、この会期の中で表明された提案に反対した。ディミトロフは、しかし、自己批判のタッチで、大衆を統一されたデモに訴えながら、コミンテルンが、実際、一九二九―一九三三年で、『左翼社会民主主義者たちの資格で社会民主主義に反対して』、あらゆるその全勢力を集中した、それは、最後に、人々が固定した目的、すなわち、諸共産党の活動の再活発化と数百万の労働者たちの闘争の中で組織を、到達するように破壊したということを、想起した。従って、第七回大会後、『もっと首尾一貫したやり方で、コミンテルンの戦術上の方向の諸決定を変更する』ように必要となった。小ブルジョワジーと農民の世界につながれた諸党と諸組織の中で同様に、労働運動によって記録された進歩及び社会民主主義と社会改良主義的諸労働組合の中で繰り返された事実上の諸変化に直面して、国際的状況の中で生じた諸変化を前にして、反戦行動は、もはや緊密な集会及び共産党のデモの組織に帰することはできなかった。反戦行動は、共同で『社会民主諸党の地方的な諸組織と一緒に、諸労働組合と一緒に、そして、ますます平和の防衛に対して方向が変わった、あらゆる一連の組織と一緒に』、まったく民衆的性格の主導権を引き起こさねばならなかった。コミンテルンの指導部の諸方法として、諸スローガンを変更するような必要性を考察するならば、ディミトロフは、付け加えた。すなわち、

『……われわれが、一九二九年と一九三〇年においてそれをするように、われわれは、一般的な諸スローガンで満足することはできない。人々は、『帝国主義戦争を打倒せよ』、『ソ連邦、中国革命、インド、等の防衛のために』、一般的な諸スローガンで満足することはできない。われわれをこれらのスローガンを具体化する、これらのスローガンをファシストたちに反対して、戦争の扇動者たちに反対して及び各国における平和の防衛のために再び回す必要がある。そして、これらのスローガンは、フランスで、ドイツで、ポーランドで、チェコスロヴァキアで、アメリカで、オーストラリアで、ブルガリアで、ユーゴスラヴィアで、等、同一であることはできない。それを、われわれは、過去においてそれを作らな

かった。しかし、それは、今後まったく、われわれの政策に、われわれの方向の決定に及び国際的状況の諸要求に照応する。帝国主義戦争に反対して、新しい戦争で火災を掻き立てる、ファシストたちに反対して、国際的デモを組織することは、必要である。すなわち、その性格が、国民的形態及び国民的刻印を与えなければならなかった、そして、各国において大衆を動員させるのに成功しなければならなかった、国際的デモ。帝国主義戦争に反対する、戦争の扇動者たちに反対するデモに対して、国際的性格を与える必要がある、そして、各国の国民的特色を考慮に入れる必要がある……。私の意見によれば……、ここにどんな決定的な問題であるということである。』（ディミトロフの介入は、『ファシズムと戦争に対して民主主義的問題の統一にとって。一九三六年と一九三七年からG=ディミトロフの三つの演説、BZGA、五号、一九七二年、七八〇―七八二頁。』の中にある。）

ディミトロフの提案は、コミンテルンの指導機関の中で保証人として、事実上、見付けなかったということを注目することは、興味深い。従って、一九三六年八月一日の日は、あらゆる努力が、『反ファシズム反戦世界委員会』のアピールについて振り向けられた、社会主義労働者インタナショナルあるいは国際的労働組合連盟の方向に共同行動のすべての提案で用心した、コミンテルンの何の顕著な主導権によってマークされなかった。恐らく、コミンテルンの指導的なサークルたちの注意は、人々が、反ファシズムの着色を和らげるまで、大衆的性格をできるだけ広げることを願った。ブリュセルの講和のための大会の準備によって独占された。（ブリュセルの大会及び起こった議論について、B=グロス B. Gross、ヴィリィ=ミュンツェンバーグ Willy Munzenberg、政治的伝記、ミシガン国立大学出版部、一九七四年、二八六―二八八頁、参照。同様に、一九三六年八月に、イタリア共産党及びドイツ共産党によって同時に起こるやり方で、『国民的和解』へのアピールは投げられたことを合図すること。ドイツ共産党及びこの意味で党の諸指令のため、H=ヴェネル H. Wehner、証言、キェルン、一九八二年、一七八―一七九頁、参照。ついては、オーストリア共産党は、八月初めに、オーストリアの講和と独立を防衛するように仕向けられた、制度に内外の全諸勢力を含まねばならなかったであろう、『反ナチ戦線』のスローガンを投げた、F=ヴェスト F. West、オーストリア身分国家で左

翼。革命の社会主義者と共産主義者、一九三四―一九三八年、ウィーン―ミュンヘン―チュリッヒ、一九七八年、一八八―一八九頁、参照。『国民的和解』の政策は、しかし、イタリア共産党に対して制限された挿話を構成する代わりに、国際的性格を採用し、直接にコミンテルンの指導者たちを関係した。ローマで、一四三一／二分冊、三六、三八―四二判、グラムシ協会の側に、イタリア共産党の文書、一九一七―一九四〇年の中で、ビボロティ（ボニ）Bibolotti (Boni)、トリアッティとディミトロフの間に、一九三七年二月で、モスクワの出合いの報告、参照。）ディミトロフが、ファシズムと戦争に反対して、彼の戦闘を継続された激しさで取り戻すことはできた、それは、単に一〇月からであった。すなわち、ソ連邦は、当時、『不干渉』委員会に対して、彼の加盟を伴った、慎重の及び躊躇の政策を断念した。そして、ソ連邦は、決定的やり方で、共和派のスペインに対して政治的及び軍事的支持の政策の中で参加した。（この点について、D=T=カテル D. T. Cattel、ソヴィエト外交とスペイン内戦、ミラノ、一九六三年、一九―四二頁、参照。かかる選択においてディミトロフの役割について、A=アゴスティ、第三インタナショナル、Ⅲ、二、ローマ、一九七九年、九五二―五三頁、参照。）それは、まさしく、あらゆる反ファシズム運動のための約束と闘争の場として、彼の深い国際的次元と彼の決定的な重要性を強調する、ディミトロフが、最も大きな政治的及び知的緊張で導いた、連帯のキャンペーンの中心的なテーマを供給した、スペイン内戦であった。すなわち、

『……現時に最も重要な闘争の目標は、ファシズムについてその勝利を保証するため、スペイン人民に対して国際的援助の組織である……。

事態が、世界の全国家のため、近い時期において起こるであろう、様式は、ファシスト圧制者たちに反対してスペイン人民によって繰り広げられた、闘争の結果の多くの側面によって依存するであろうし、展開するであろう。スペインでファシズムによって犯された侵略は、一度ならず、ファシズムが、単にプロレタリアートの、ソヴィエト社会主義共和国の最悪の敵でばかりでなく、たとえ、この国家の政治的及び経済的制度が、ブルジョワ社会の限界の中で留まるにしても、ファシズムが、同様に、あらゆる諸自由の、各民主主義国家の敵であるということを、証明した。

ファシズムは、それ自体で、諸人民のあらゆる民主主義的征服の破壊、中世の蒙昧主義の支配の創設及びすべての文明の破壊をもたらす。ファシズムは、ファシズムと一緒に、あらゆる人種差別主義の脱線を引っ張り、掠奪の戦争を解き放つような目的において、人間たちの間に憎悪を拡める……、カタローニャで、マドリッドの壁の前に、アステュリアスの山々において及び全半島において、共和派軍隊の戦士たちは、単に共和派スペインの独立と自由でばかりでなく、全人民の民主主義的征服と戦争の扇動者たち、ファシストたちに反対して平和の立場も……防衛する……。

スペインで人民戦線の運命は、……もっと緊密なやり方で、ヨーロッパで民主主義の運命に及び全国家において反ファシズムと反戦闘争に、なおつながる。』（『反ファシズムと反戦闘争の人民戦線』、引用書。この背景において、実は、イタリアで同様にドイツで、『国民的和解』の政策の放棄は、記録される。ビボロッティとすでに思い出された出合いの機会に、トリアッティは、人々が、このスローガンをもはや使用しないように、ドイツ共産党に対して要求したということを、指摘したし、ディミトロフは、彼が、『ファシズムと及びそのようなものとして制度と和解』として解釈されることはできた、そして、『ファシズムを改良するため、闘争を繰り広げる必要があった、考え』を引き起こすことはできたという程度に、イタリア共産党が、『完全に和解の言葉』を除去しなければならなかったということを、付け加えた。それに反対して、ムッソリーニの対外政策についてよりむしろ、『広範な人民大衆の経済的及び社会的諸要求』について、党の中心点を移すことは、必要であった。コミンテルンの政策の動揺を説明するため及びエチオピア戦争の後、このディミトロフの観察は、はっきりさせる。すなわち、『このムッソリーニの政策は、イタリアを、ヒトラーの戦争と征服の政策の道具として変化させる。その権力の初めの数年において、ムッソリーニは、かかる政策を追わなかったし、そのソ同盟と諸関係は、正常であった。一九三四年と一九三五年で、ヒトラー＝ムッソリーニのかかる同盟は、考えられないことであった。この政策は、専らドイツとヒトラーのために作られる。イタリア人民の諸利害は、ソ同盟と平和及び協商の政策を要求する。』（イタリア共産党の諸文書、一四三二／二分冊、三六判、三六判、三九―四〇判。同じ会議において民主主義共和国のスローガンに関係がある議論について、P＝スプリアノ P. Spriano、コミンテルン書記、エルコリ同志、ローマ、一九八〇年、七七―八六頁、参照。））

人々は、単に、ディミトロフが、フランコの傍らにイタリア＝ドイツの干渉を告発した時、ディミトロフが示した、明晰さと明敏さによって驚かされることはできる。ディミトロフは、戦争の運命、長期の彼の支配の計画と同時に彼の犯罪、国の経済的資源及び原料について彼の独占的支配の意思、フランスの包囲の調査、そして、ファシスト諸制度が、解き放つのに準備された、一般化された紛争の仮設において、地中海で興味深い戦略上の諸態度の探究を転倒させるため、完璧な努力において彼の決定的な重要性を強調した。（G＝ディミトロフ、『スペイン人民の英雄的な闘争の一年』、コミンテルン、一九三七年一月二四日、参照。同上、『スペイン人民の英雄的な闘争の二年』、引用。）スペイン戦争に直面してイギリスの及びフランスの態度、そして、それと同時に『不干渉政策』という名の態度、スペインの合法政府のあらゆる国際的諸権利を保証することはできる、すべての主導権を警戒した、そして、単にすべての制裁の形態を適用するばかりでなく、ドイツの及びイタリアの軍事的存在の生存自体を承認するように拒否した、国際連盟の麻痺、すべてのそれは、正当にも、ディミトロフによって、『不名誉なことの頁の一つ』として及び『ファシスト侵略者たちと攻撃者たち』に対する客観的な激励として、定義された。（『英雄的な闘争の一年』、引用。）ディミトロフは、ファシスト諸国家が、国際連盟の及び非ファシスト諸国家の側の確かさの態度を確認した時、ファシスト諸国家はそうしたように、人々が、戦争の亡霊を行動した時、人々は、『大きな大衆の自然発生的な傾きを特徴づけた、戦争への敵意の感情を』（同上。）当て込んだということを、評価した。反対に、フランコ主義者軍隊の敗北は、まったく同時に、スペインでファシズムの物質的及び政治的基盤を破壊したであろうし、『フランスで、イギリスで及びファシズムが、諸人民によって獲得された民主主義的諸権利及び諸自由を破壊するように脅やかした、あらゆる国々における』、民主主義的軍隊を強化したであろう。それらの敗北は、『ヒトラーの及びムッソリーニの軍事的侵略の諸計画に対して敏感な打撃』をもたらしたであろう、『世界平和の維持』に貢献したであろう、そして、『イタリアの及びドイツの内部自体で及びファシズムが、その支配を行使した至る所で、人民大衆の民主主義的諸運動の可能な推進』を提供したであろう。（『一九三七年の初めに』、引用。）ファシズムの一つの勝利は、逆に、その

『地中海で軍事的及び戦略上の諸態度』の強化に帰着したであろうし、一般化された戦争の脅威を広げたであろう。平和の維持を望んだ者は誰でも、従って、『ファシスト侵略者たちが、できるだけ早く、スペインから追い出されるために及びスペイン人民が、彼の固有な自由及び彼の独立を自由にすることはできるために』行動しなければならなかったであろう。（『闘争の一年……』、引用）

コミンテルンの指導者たちの間に、ディミトロフは、最も意識の間に、知識人たち及び文化人たちの先例のない参加と一緒に、スペイン共和国に関して連帯の自然発生的な運動が、反ファシズム闘争の及び大多数の国において平和を考慮して、強力な民衆運動の飛躍に開いた、重要な可能性であった。一九三六年一一月に、ディミトロフは、すでに、あらゆる『最近の諸事件と、最初に、スペインの諸事件の教訓が、あらゆる手段によってファシスト＝テロ行為に反対して、民主主義を防衛するような時は来たという事実から当然、そして、もしも時を手に武器を必要であったならば、証明したということを、書いた。

そして、ディミトロフは、付け加えた。すなわち、

『今日、遠い脅威で問題がないが、ドイツ及びイタリアと同じ重要な国々において、彼の独裁を安定させた後、そして、スペインで同じ道を続いて起こった後、ファシズムが、毎日、もう少しで、労働運動を押しつぶすよう、そして、世界帝国主義戦争を挑発しながらずっと、他の国々における民主主義を廃止するよう、努めることはできたという事実から当然、問題があるということを、よく理解する必要がある。

そして、スペイン人民に反対するファシズムによって解き放たれた戦争が、最後の戦争になるかも知れなかったということを、考えをいい気になるように無益である。ファシズムは、フランスの、ベルギーの、チェコスロヴァキアの民主主義陣営に反対して、イギリスの、スカンディナヴィア諸国の及びなお多数の他の国々の民主主義陣営に反対して、その悪い打撃を準備する……。新しい帝国主義戦争を準備するため、対外領土を征服するため、他の諸人民で屈服させるため及

びソ連邦に反対して、十字軍を組織するため、ファシズム……は、労働運動を押しつぶすように、ヨーロッパ民主主義を無に帰させるように、欲求を感じる。』

以上のことから、ディミトロフによって、国際的レヴェルについて同様に国民的レヴェルについて、ファシズムに直面した後退のすべての形態の告発である。すなわち、

『人々は、ここかしこに、人民戦線の創設が……、単にファシスト侵略を増強させる、民主主義に反対して武装された、及び、結局、ファシズムの不可避的な勝利に導かれた、ファシズムの干渉を促進させることを、暗示する……。さて、これらの貧乏な民主主義者たちが示す、この子羊たちの賢明さよりも、何も、もはやプロレタリアート及びブルジョワ民主主義の国々の人民のために、誤っていない及び危険はない。その賢明さは、決まり文句で要約される。すなわち、もしもあなたは、攻撃されることを欲しないならば、野獣を怒らせないようにせよ……。

われわれは、逆に意味で……、人民戦線が、フランスでファシズムに道を防害した、そして、人民戦線のお陰で、スペイン人民が、英雄的に……彼の自由と彼の独立……を防衛することを、確認する。

確かでもなく、人々が、『野獣を怒らせない』ことを願う、政策は、完全に何も価値がない。あらゆるケースにおいて、この政策は、労働者階級のために、民主主義のために及び平和のために有害である。ファシスト野獣を馴らす、野獣を人民戦線の堅い拳を対立させる、野獣を鉄の口輪を押し付ける、拳を打つ、そして、民主主義的征服を救助するため及び平和を保護するため、野獣を止めの一撃を与える必要がある。』（『反ファシズム及び反戦闘争の人民戦線』、引用。）

ディミトロフは、労働者階級が、『新しい世界戦争の不吉な脅威』に反対して、そして、『全ヨーロッパの民主主義の、文明の及び文化の』防衛のため、『労働者階級の周りに、あらゆる労働者たち、あらゆる民主主義的諸勢力、あらゆる反ファシストたちを集め』ながら、人民戦線の建設において『決定的な役割』を演ずることを、労働者階級から期待した。（同上。）そのように、労働者階級は、小さな諸国民と、平和の維持に利害関係のあったブルジョワ民主主義的諸国家を含

む、そして、ソ連邦と最も緊密な統一において、そして、ファシズムに対して断固たる抵抗の及び諸人民の独立と自由の保護のソ連邦の政策を影響を及ぼす、広範な運動を構成したであろう。反ファシズム闘争は、こんなわけで、『平和のための闘争に対して解消できない関係』によって結び付けられた（G=ディミトロフ、『ファシズム、それは戦争である』、コミンテルン、一九三七年八月七日。）、そして、反ファシズム闘争は、深いイデオロギー的な内容で引き受けた。すなわち、ソ連邦の及び建設中の社会主義の防衛の路線に対して、今後、ファシスト諸制度が、その使者たちであった、蒙昧主義及び野蛮に反対して、西欧の伝統及び一七八九年の大革命によって遺贈された、文明の、自由の及び民主主義の諸価値の回復は、付け加わった。そうしながら、反ファシズム闘争は、プロレタリアートによって引き受けられた解放の歴史的使命と一緒に、その本質の中に混同されるため、一時的な政治的局面を越えてよく進行した、ある方向を選び取った。すなわち、

『現在の時期において、歴史は、国際的プロレタリアートに対して、より重大な使命を打ち明ける。すなわち、人類をファシスト野蛮から、ファシズムが、それを準備する気になっているように、新しい帝国主義の恐怖から救うこと。』（『現在の時間の崇高な要求、労働者階級の統一』、引用。）

この平和の運動の考え方は、広く、コミンテルンの上部に同様にソ連邦共産党の上部に支配した。ソ連邦の単なる防衛の言い回しで、戦術上の解釈を非常に越えて進行した（G=プロカティ、『一九三〇―一九五六年、ソ連邦の外交政策の視点と問題』、ソ連邦の政策と歴史のモーメントと問題の中で、ローマ、一九七八年、参照。）。すなわち、その考え方は、国際的舞台について、突然の『他の場所から転覆』の仮設に悪く応じた。別の所から、戦争の不可避性と見なす諸態度（コミンテルンの中で非常に広がった諸態度）に反対して、ディミトロフは、はっきりと独善主義の進め方によれば、平和の防衛が、『個別に各国において及び国際的レヴェルについて、ファシズムに反対して人民大衆の恒常的な及び統一された闘争』に結ばれたということを、あくまで言った。（『労働者階級の統一……』、引用。）戦争の諸勢力と平和の諸勢力の間の均衡は、もはや一九一四年の均衡でなかった。そして、労働運動は、『スペインでドイツ及びイタリア＝ファシズムの干渉及び中国で日

本の軍事的路線の侵略を止めるため、世界の平和を保証するため、諸勢力と十分な諸手段を』自由にした。

『全人類の共同敵に反対して、ファシズムに反対して、国際的労働者階級の行動統一』を実現するような必要性は、従って、第一のレヴェルに戻ったし、『全世界の労働者諸組織の基本的な及び直接の目的……現時の崇高な要求』になった。（『ファシズム、それは戦争である』、引用。）共和制スペインに対する国際的支持及びイタリア＝ドイツの軍隊の撤去のための闘争、封鎖の終わり及びスペインの正統的政府の国際的諸権利の承認、侵略者諸国家に反対する国際連盟によって決定された制裁の適用。すなわち、そのようなものは、相互の偏見及び不信が、エチオピア戦争の時に失敗させたということを、コミンテルンと社会主義労働者インタナショナルの間に行動統一を推進するため、有利な活動の場であった。

そのように、アルメリィアの爆撃の後、スペイン共産党の、スペイン社会主義労働党 ＰＳＯＥ の及び労働総同盟 UGT の共同アピールで捕らえて、ディミトロフは、社会主義労働者インタナショナルの議長、ドゥ＝ブルケール De Brouère に対して、彼に共同会議の召集及び『スペインでドイツの及びイタリアの軍事的干渉に反対して』必要な主導権を調整するのに当てられた、常設の協調委員会の創設を提案するため、話し掛けた。（『労働者階級の統一……』、引用。）社会主義労働者インタナショナルの消極的な返答の後、ディミトロフは、国際的行動統一が、スペイン人民を考慮して、連帯の運動の勢力を倍加することはできたであろう、そして、もしも社会主義労働者インタナショナルは、コミンテルンの諸提案を、『中期に到達するため、他の具体的な諸提案で』、承認できないと判断したならば、社会主義労働者インタナショナルが、前進する義務があったということを、再確認した。続いて起こった数日において、ディミトロフは、なお書いた。すなわち、『各国において及び全世界において、労働者階級の及びその階級の諸組織の統一を持っていたであろう、広大な影響力及び諸結果を理解しないため、完全な政治的失明で到達される必要がある。このような行動は、最も広範な人民大衆を揺り動かす及び動員することはできたであろう。ヒトラーの及びフランコの陰謀を隠す、イギリスの保守党員たちは、逃げ場がなかったであろう。イギリスの及びフランスの諸政府は、ドイツ及びイタリア＝ファシズムの干渉に反対し

て、精力的な進め方を企てるように余儀なくさせたであろう。人々は、スペインの外に、ドイツの及びイタリアの軍隊の撤去及びスペインの水の外に、干渉主義者たちの軍艦の呼び戻しを押し付けることはできたであろう……。全世界における労働者階級の行動統一は、スペイン共和国に対して及びその英雄的な戦士たちに対して、広大な精神的援助、しかし同様に、恐るべき物質的援助を保証したであろう。すべてそれは、明白に、スペイン人民の勝利を促進したであろう。結局、全世界における進歩主義者の諸勢力の統一された圧力は、戦争の扇動者たちを阻止するように認めたであろう。[三]』

コミンテルン第七回大会後、G＝ディミトロフは、その全面的な賛同によって、ソヴィエトの『モデル』として、諸人民戦線の枠内に社会主義に対して、前進の独創的な戦略の研究を放棄するのに考えられた、問題に導かれる。しかし、その考えの独創性は、平和のため、反ファシズム闘争のため、そして、社会主義のため、諸統一戦線の構成が、呼応しなければならない、ファシスト諸国の特徴的に攻撃的な性格の分析の中で現われる。[四]

注記。スターリンは、一国的＝国家的社会主義論に没頭し過ぎていたし、コミンテルンは、世界的革命論を信奉していた。その世界的革命論は、現存のソヴィエト社会主義革命論（武装蜂起）の模倣であった。ソ連とコミンテルンは、原則として両輪関係であった。ソ連では、フルシチョフ「秘密報告」「スターリン批判」（一九五六年二月）は、一九八九年三月になって、『ソ連共産党中央委員会通報』で公表された（三三年一月振り）。コミンテルンは、まだまだ闇の中に置かれている。「モスクワでコミンテルンの諸文書は、閉じられたままである。[五]」コミンテルン資料は、今日ソヴィエト共産党が管理しているが、ほとんど公開しない。コミンテルン資料は、「七つの印」で封じられているとさえ言われている。「実際のところ、この重大局面全体は、資料裏づけの現状では、大部分が闇に包まれている。」「生憎なことに、コミンテルンの記録保管所には研究者が十分に近づけないので、その代わりに、断片的な文書資料や、……ソヴィエトの歴史家から提供される不十分な情報に基礎を置かなければならない。」「われわれは、議事については生憎ソヴィエトの原資料から取ったわずかばかりの抜萃しか知らない……。」「準備段階の討議の大部分が隠蔽されているだけでなく、公開の大会議事につい

てもわれわれが利用できる速記報告は完全でなく、委員会活動はこれまで一つとして公表されていない」、「これまでのところ第七回大会の完全な速記報告は公表されておらず、一方、大会文書の外国語版は、重要箇所の偶然とは言えない省略を示している。第二は、スターリンが、大会中にも、その後でも、新政策への裏書を少しも公開的に述べたことがない。最後に、極めて意味深長なことであるが、インタナショナルのソヴィエト人代表の中もっとも権威があり、周知のようにスターリンに近い人物であるマヌイルスキーが、モスクワの党活動家（九月四日）とレニングラードのそれ（九月五日）に第七回大会の報告を行い、その中で、革新的意義を反映する諸決定の説明と並んで、「第三期」特有の断固たる口調と定式に立ち返った。次の箇所がとくにそうである。彼はここで、大会が人民戦線問題に与えた問題設定が、ファシズムと社会民主主義は「双生児」と見なさなければならないというスターリンが一九二四年に述べた有名なテーゼと矛盾しないのだと主張しようと懸命になっているのである。[六]」採録資料（間接資料）約六五〇点は、今日知られている印刷されたコミンテルン公式文書の総点数の四割に当たり、直接資料は封印されている（村田陽一編訳『コミンテルン資料集』第一―七巻、大月書店、一九七八―一九八五年）。コミンテルンの歴史は、いわゆる正当な歴史ではない（岩波講座『世界歴史』24―29、岩波書店、一九七〇―七一年、参照）。コミンテルンの時代には、残念ながら諸共産党はソ連邦で成長する一本の大樹の若枝としか見られていない。スターリンが、非常に怖れていたのは共産主義運動内に強力な独立の「センター」が出現することであった。[七] コミンテルン第七回大会前後の時期に、コミンテルン中央の執行部レヴェルにおいて、新しい反戦反ファシズム戦術等を巡って「新指導部」と「旧指導部」との対立関係が存在し、相拮抗していた事実が明るみに出されてきている。G＝ディミトロフは、「新指導部」として、一九三三年ライプチッヒ裁判の経験を持ち、反戦反ファシズム闘争に関する人民戦線戦術の第一級の指導者であった（山極潔『コミンテルンと人民戦線』青木書店、一九八一年、八七頁再考）。総じて、コミンテルン第七回大会では、ファシズムと真っ向から対置されるべき民主主義一般について、十分な説明を与えることができないでいた。一九三〇年代のコミンテルン組織は、思想的にも行動的にも、いわゆる「スターリン主義」（スターリン

時代・体制）的な体質に染まり切っていたと考えられる。ブルガリアのG=ディミトロフは、いわゆる「小スターリン主義」的もしくは「亜スターリン主義」的体質を色濃く保持し続けていたと考えてよい。例えば、「（一九三七年）十一月十二日のリュマニテ紙はコミンテルン書記長ディミトロフの論文を載せたが、その調子は「階級対階級」戦術の時代への復帰を思わせる厳しいものであった。「社会主義への移行、約束されていたような平和的で無痛の移行どころか、社会民主主義はその降伏と執行猶予の政策によりファシズムの勝利をきよめた。……同志スターリンが十年前つぎのように書いたとき、かれはとほうもなく正しかった。『労働運動内の社会民主主義を片づけることなしに資本主義を片づけることはできない。』」」（平瀬徹也『フランス人民戦線』近藤出版社、一九七四年、二〇六頁参照。）コミンテルン各国支部の極めて多様性に富んだ貴重な経験が、一義的な、しかも金科玉条的な「スターリン主義」的なテーゼの厚い壁を決潰させないまま、またコミンテルン全体の思考並びに行動様式の一大変容を結実させないまま、その連続線を描き続けた。さらにコミンテルン各国支部レヴェルでのナショナルなモメントとコミンテルン中央レヴェルでのインタナショナルなモメントとが、これまた微妙な相関関係を描いている点が問題であろう。(八)「コミンテルンはソ連の対外政策の下部機関にほかならなかった。」「このころから、コミンテルンは世界革命の組織としてよりも、ソ連の対外政策を補完する別動隊としての機能を優先させるようになった。世界革命の幻想を捨てたスターリンにとっては、国家としてのソ連の利害の擁護が最大の課題であり、世界革命はコミンテルンの看板に過ぎないものに変わっていった。」「コミンテルンの政治的機能は、「世界革命」の参謀本部であるよりもソ連の対外政策に奉仕するための機関へと変質しつつあった。」「コミンテルンはソ連の対外政策に従属させられていたのであった。」（斉藤孝『ヨーロッパの一九三〇年代』岩波書店、一九九〇年、七、一五、七〇、七三頁参照。）それは、「その指導者スターリンの権威をソ連国内のみならず国際共産主義運動の内部でも神格化の域にまで高めた。」（岡本宏「統一戦線の史的動態」熊本大学法学部創立十周年記念『法学と政治学の諸相』、一九八九年、七五七頁参照。）ところで、「ソ連の学者にとっての重要な改善は、一九八七年、八八年にみられた。……コミンテルンのアルヒーフも、最近「党内用」に開

放された。」（R・W・デイヴィス、富田・下斗米他訳『ペレストロイカと歴史像の転換』岩波書店、一九九〇年、二八八―二八九頁参照。）一つの例証として、一九三六年一二月、これらすべては、ディミトロフとコミンテルン執行委員会指導部がその時期にポーランド共産党をどうにかして火中から引き出そうと努めたことを証明している。一九三七年、スターリン＝エジョフ＝ベリア（グルジア人）は、ポーランド党幹部に対する大量テロへの道を開いた。例えば、コミンテルン文書庫に保管されている一九三八年八月一六日付のポーランド共産党解散に関するコミンテルン執行委員会幹部会の決定。一九三七年一一月二八日にスターリンに送られたポーランド共産党解散に関するコミンテルン執行委員会の決議草案に関連しての同年一二月二日付のスターリンの決定。ディミトロフはすでに一九三六年末にポーランド共産党にのしかかった恐るべき危機を取り除こうと努めたが、それは彼の力では及ばないことであった。(九)

四

第四の論文は、リカルド＝ヴィニェス Ricard VINYES（スペイン研究者）『反ファシズム、共産党員たち及び前線民衆主義 frontpopulisme。討論から対話まで。』である。論文は、五〇年振りで、回想されている。（ポピュリスム（民衆主義）は、心理分析に基づくブルジョワ文学に反対し、庶民の日常生活の素朴な描写を目指した一九三〇年代フランスの文学運動である。）

数年前、私は、幾つかの段階において、何の基礎について、現代のヨーロッパ左翼の政治的文化が建設されたことを知るように問題に返答することは主張する、研究の大綱領を始めた。私の注意は、二〇年代と三〇年代によって、及び非常に具体的に、前線民衆主義の現象によって捕らえて離さなかった。わが国でこの社会運動の特異性は、私をひどく変わっている事実を確認するのを助けた。すなわち、ドイツ、フランスあるいは後でソ連邦のようなヨーロッパ左翼の政治的文

化の周到な作成と富裕化の中で、伝統的に支配を目指した諸国は、立役者たちとして消滅した。その結果、一九四五年から一九七三年まで『発展の大きな時期』の間、第二次世界大戦の後、重要な質的比重を持つ義務があった、多元的な性格の貢献に対して地位を残した。諸国の貢献は、基本的な伝言を含んだ。すなわち、経済計画、投票及び混合経済。これらの政治的な構成要素は、戦後のヨーロッパ左翼を、世紀の最初の四〇年代の構成要素と区別する義務があった。もちろん、例外はある。そして、もちろん、たとえ、これらの国々のもっと多くの国が、外の軍事的圧力の下に、他の指導部で取りしきることを余儀なくされたとしても、ある例外は、フランスの及び東ヨーロッパのより大きな部分の例外として有名である。しかし、要するに、それは、前線民衆主義からであった、実は、われわれの大陸について、左翼の政治的文化は、主導が権力に本質的に依存した、一方的な計画の賛同と同化によって、ますます政治的『混血』の形態の下に、特徴づけられる。

三〇年代の動員に参加した、人々の意見が、歴史家たちの結論と矛盾して含まれたということを、私は観察して驚いたということを、私は言わなければならない。実際、これらのその年代の熱狂的な希望の雰囲気において参加される、共産党員たちと他の革命家たちは、前線民衆主義の数日間、すべては、共産主義運動のため変わったということを、私をしつこく注意させた。私が相談することはできた、研究論文集のあらゆる文献は、第三インタナショナル第七回大会に適用された特性、『大きなカーブ』に対して参照を含む。それに反対して、歴史家たちの大部分のもっと最近の研究は、実際には、この大会が、共産党の指導部の計画における主要なものとして少しも変えなかったということを、述べる。そして、私は、それによって説得される。しかし、個人的な政治的意識と研究の間のこの相違は、史料編集の仕事の枠内に理解され得る義務があった、現実の矛盾が存在するということを、暗示する。提起される問題は、社会運動の国民的枠と国際的枠の諸計画に対してその多様な関係の間、関係を提出するように問題である。この具体的ケースにおいて、前線民衆主義—反ファシズムの建設する政治的表現—と第三インタナショナルにおいて組織された共産主義運動の間に、関係のケース

がある。

この研究を企てるため、問題は、揺るがないモデルを押し付けた、私の意見によれば、フランスのケースに努めた、図書目録の性質自体によって提起された。疑いもなく、多くの理由のため、優れたある図書目録であり、しかし、私の観点から、小さな『適切な』修正と一緒に、あらゆる変形に適用し得る大説明を構成するのに当てられた、一方的な解釈的な図式を提出する、ある図書目録である。この図書目録は、人々が、人民戦線の起源を割り当てる、マルクス主義者の諸組織と共産党員たちの政治的計画に対して、現実の社会運動の従属の考えを維持した。この展望において及びソヴィエト対外政策に対して、コミンテルンの諸支部の漸進的な従属の明白な事実を前に、演説は、非常に異論のある原因のつながりによって、ソヴィエトの利害とヨーロッパで人民闘争の間、『偶発的な偶然の一致』として定義され得る、国際的政策の解釈のモデルの枠内に、人民戦線を位置づけた。しかし、その上に、図式は、彼の正統性を保証し、彼の成功を遮蔽する、論理を自由にした。図式は、恐ろしい作業を含む。すなわち、どんな成功でももしくはどんな災害でも、丁寧に、決定と見なした中心に起こった、変化と成功の光に解釈される、そして説明されることはできる。すなわち、コミンテルンと、審議中の、ソ連邦共産党の政治局。換言すれば及びモデルを拡大適用しながら、諸社会運動は、国際的な指導する諸決定機関と諸社会運動の政治的表現の間に決定された、決定に関する通信は存在することを考察しながら、注意を向けながら、大制度上の網に解釈される。この範列の結果の一つは、気も狂いそうにさせるジレンマの公式化であった。すなわち、人民戦線は、パリであるいはモスクワで生まれたか。この問題を公式化するような事実は、皆のため、共産党が、必ず、現実の運動を犠牲にして、国民的生活の主な主題であった、そして、その経験的な根拠が、決定の諸機関に、それらの指導部に及びそれらの内部の活動に関係のある、参考資料の研究に成り立った、文献を挑発する義務があった。理論的考察と、一部分は、これらの機関の内部に実践された主導のための闘争との間の関係、そして、反ファシズム運動及び一般的に言って民衆の動員は、これらの最高機関の命令、協定及び策謀と同時に起こる、社会的動揺の一日分の食糧の割当量を供

給した、非常に便利な『民衆の弁』を開きながら、状況に応じて解決された。

この解釈のモデルは、フランスで、有利な活動の場を出会った。このモデルは、あらゆる必要な諸条件を満足させた。すなわち、そこで、コミンテルンにおいて確実な比重の重さがあった、そして、ソ連邦共産党の側の特殊な注意、すなわち、フランスの態度が、国際的均衡において重要性の点でよくなったにつれて、及びもちろん、ショックを与えたソヴィエト対外政策と関係して増大した、注意で享受した党、強い及び戦闘的な、労働組合的に強力な及び社会的に影響力のある共産党があった。その上、豊富なフランスの反ファシズムの動員は、どんなやり方でも利用されることはできたし、全部のため、使うことはできたし、人々は、どんな解釈的な計画にこの動員を合致されることはできた。フランスのケースは、同じテーマを絶えず主張する、この上なく敗北された仮設を再確認するように認める、『カムフラージュされた』最後の資料について議論する、社説の品切れまで諸議論を繰り返しながら、人民戦線と反ファシズムにかかる文献の特権的な活動の場を構成したことは、驚くべきではない。しかし、この研究の方向は、人々が、フランスのモデルを放棄する時、窮地に立っている。すなわち、前線民衆主義がカタローニャ、ユーゴスラヴィアもしくはスペインのような重要な力であった、国々における共産党の不存在—もしくは彼の単なる小集団の生存—。一度消滅された中心の議論—共産党の力—は、この史料編集に対して、戦闘的な政治的組織によって現実の運動を存続するように許した、弁証法的なゲームを不可能にする。他方で、私が、実例として与えた、国々の国際的均衡における参加は、一九三六年にまで、二次的であった。それは、非の打ち所がない諸決定の容易な詭弁の違った観点を等しく要求する。すなわち、特別に、これらの国々において、国際的諸事件の圧力が、直接のやり方でなくて、ケースによって、非常に特殊な変形のために現われたことを、人々は、確認する時。

しかし、註釈された史料編集の最も積極的な側面の一つは、以前に叙述されたモデルのため、断絶もしくは継続の間に均衡した、しかし、社会的及び政治的状況に対して、側面の指導者たち及び側面の自治の内部の成熟によって、生まれた

共産党の政治的文化における、発展の可能な存在のテーマについて主に働いた、現在の批判的推移の出現に貢献することであったということを、私は言わなければならない。コミンテルンの公式の政策において、―この制度は、研究の主な研究の対象であったということを見られる―、そして、人民戦線の諸現象に対して、あるいはなお、諸同盟の困難な問題提起に対して、コミンテルンの報告において、本質的な計画の継続の残存物をさらす、この方向において進む、それは、諸研究であることを、私は信じる。この史料編集は、妥当と思われるやり方で、普通に第七回大会に位置づけられた変化、すなわち、彼の過去に対して、コミンテルンの計画の本質的な『カーブ』の不存在を証明した。それは、人々が、全体として受け入れることはできるということを、結論である。単に異論がある。すなわち、諸決定を取られ推測された、指導部の枠内で、共産主義運動の短縮は、視線及び問題から遠く、暗い片隅において、二〇年代及び三〇年代のヨーロッパ左翼の諸社会運動と共産党員たちの間に、相互関係と対話を残し続ける。しかし、もしも、共産党員のミリタンたちの意識において、あるものは変わったという考えは存在するとしても、それは、ミリタンたちの日々の政治的行動が、コミンテルンの及び最も目立つように及び最も尊敬されたミリタンたちの指導者たちの公式の演説と同意して、現実に変わったという、本題に起因することを嫌疑を掛けるため、ある数の理由は存在することを、私は考える。

しかし、なぜ、社会運動と決定に関する中核の間の相互関係に対して、かかる重要性は与えるのか。とにかく、われわれを占める問題において、モデルではない、しかし、関連して特殊なケースであるということを、正確に証明するため。カタローニャのケースは、それを証明することを、私は信じる。（それは、確かに、前線民衆主義が、革命を組織した、そして、後に、それらの政治的な及び理論的な経験の幾つかのものを輸出する、三年間、革命を維持した、国である。）諸同盟の発展と諸同盟の諸計画に関して、共産党員のミリタンたちの及びコミンテルンの演説に対してミリタンたちの報告の政治的文化において、振舞った変化について、もっと抽象的な実例を、私は提案するようにより好む。

『イスクラ』紙の編集に対して、サン＝ペテルスブルグのある労働者によって書かれた、ある手紙は、われわれを、共

産党の文化のある本質的な側面を証明する。すなわち、『われわれは、『イスクラ』紙に書いた。その理由は、『イスクラ』紙は、われわれを、単にどこを始めるばかりでなく証明する、しかし、『イスクラ』紙は、われわれを、等しくどのように生きるか及びどのように死ぬかということを学ぶ。』『イスクラ』紙の通信員は、彼が、全ヨーロッパで一九世紀の革命的文化の中で現われる、そして、民衆の民俗学の世界で同時に社会的文献で、集団に信用、計画の周りに勇気、規律、結集力として諸価値に支えられた、以前の見抜き得る遠方の眺めを持つ、戦闘的な神秘的な伝統から発したということを、証明した。しかし、同様に他に問題がある。すなわち、一九〇〇年と一九〇三年の間、出版物のため作成された計画に対する特別の賛同。われわれは、『イスクラ』紙のモデルを知っている。そして、詳細に入ることは必要でない、モデルの最も重要な要素は、正しく提案された細心の組織である（……）。それは、現われ始めた、政治的文化の最も本当の特異性であったことを、私は信じる。『イスクラ』紙のモデルの最良の保証は、一〇月革命の成功であったことは、確信している。彼の国の外に、ソヴィエト革命は、最初に一か八かの勝負をする de tous pour tous 革命として解釈された。すなわち、われわれが、今日、それについて知っている問題に対して、ソヴィエト革命は、その革命が、彼の現実の成功の見事さのお陰で、ぼんやりと結び付いた、左翼に対して固有な革命として『強く感じ』られた。(10)

しかし、一か八かの勝負をする革命であった、革命は、少しずつ、ボルシェヴィキたち、左翼の一部分の革命に変化した。諸共産党は、彼らの財産を要求した。諸共産党は、労働者たちと農民たちの勝利として革命を提出した。しかし、共産党とソヴィエト革命の間の同一化は、問題に検討されることはできなかった、何かに変化した。その上、世界の被抑圧者たちに対して、一〇月革命は意味した、前進とその実現におけるボルシェヴィキたちの独占権の間の相違を作るように、幾つかの部門—オーストリア＝マルクス主義者たちのように—の企ては、冷酷に、コミンテルンによって、あるいはむしろ、二つのインタナショナルによって戦った。それによって、主に、実は、その成功によって保護された革命と革命を作るための唯一の道の間の、そして、時間通りにどのように闘うか、どのように生きるか、及び何のやり方で指示した、そ

して、なぜ、以前数年、『イスクラ』紙の読者が、それを説明したように、献身する必要であったか、全体の同一化は、進歩したであろう。

この過程において、獲得された諸共産党のミリタンたちにあって、歴史＝政治的な意識の周到な作成と強化を説明する、基本要素の一つは、組織のモデルである。それは、そこで、激しく動く彼の誕生に対して、コミンテルンの中で方向の決定の変化の最初の企てのケースである。すなわち、戦闘的な下部組織において、統一戦線の計画を挑戦する、反対。コミンテルン執行委員会の最初の拡大大会において、この戦闘的な下部組織の意識は、願った歴史的な範列に対して完全に熱心であることを明らかになった。すなわち、コミンテルンの指導者たちが、革命は、ヨーロッパで広がるように非常に遠くにいた、そして、もしも社会民主主義と広がるように必要であったかどうか、知っているまで、共産主義運動を『軌道修正する』ように必要であったということを、承認した時、下部組織の不賛成と拒否は、ジノヴィエフが、皆が静かに眠ることはできたということを、正確にするように余儀なくされた、かかる点に対して、期待されなかった。その理由は、共産主義運動の最も重要な部分は、触れられなかったであろう。そして、組織は、確かに最も重要であった。すなわち、『党は、階級ではない、党は、労働者階級の頭部である。われわれは、決して社会民主主義者たちと単独の党を構成するように受け入れないであろう。すなわち、それは、裏切りに価値が等しいであろう（……）。この感情は、不明瞭な考えにおける彼の根源を持っている限り。すなわち、あなたは、皆を集めよ、そして、単独の党を形成せよ、感情は、誤ったそして反動的なままである。』（ソ連最高裁判所は、一九八八年二月一三日、総会を開き、ジノヴィエフらの判決を取り消す決定をした（名誉回復）。）

集会の利害は、三つの委任―フランスの委任、イタリアの委任及びスペインの委任―は、統一戦線に反対投票したことを、実際には、存在しない、しかし、諸社会党と協定を確立するため、すなわち、協定の起源を否認するため、ミリタンたちの消極的な態度の説明において存在する。ポーランドの代表、ヴァレッスキィ Walecky は、たとえ彼の党の指導部

が、統一戦線戦術を受け入れたとしても、なぜなら下部組織は、完全にその戦術を拒否したから、諸問題は、残っていたということを、確認した。フランスの委任の態度の説明の時、同じ問題は、生じた。すなわち、『人々は、一九二二年のための彼らの出資を支払うように拒否する、そして、同志たちが、彼らの証明書を取り戻しはしないであろうということを、宣言する、同志たちと出合う。』しかし、共産党のミリタンたちをいた、最良を証明した人、それは、イタリアの代表たちの一人、テラティニィ Terracini であった。扇動でなく、念入りに作り上げられた報告の中で、テラティニィは、たとえ他の方向の決定が、それらの労働者たちと関係に対して、もっと有効であることをできたとしても、共産党を特徴づけねばならなかった、革命家たちの中核を強くすることは必要であったということを説明しながら、孤立された共産党を維持するような必要性を確証した。すなわち、『そのように、戦術上の及び議会の協定の戦術は、大衆的団結に対して、大多数の支持者たちを失わせたであろう。協定と一緒に、恐らくわれわれは、一〇万の労働者たちを持っていたであろう、しかし、同時に、少なくとも一、〇〇〇人の共産党員たちを失ったであろう。私は、しかし、この一、〇〇〇人が、われわれと残っていることを、より好む。その構造自体によって、共産党は、すべてのブルジョワ権力に反対して対立を構成する。』そして、ベルリンで行われた、三つのインタナショナルの集会を非とした後、共産党は、確証した。すなわち、

『われわれは、従って、統一戦線についてテーゼを承認するであろう、しかし、テーゼは、いかなる国で、規律の誤りによってではなく、しかし、内部のレヴェルの理由のため、適用されないであろう。われわれは、制限された限度において、その適用が不可能であるのに、この問題が、大きな諸組織のため、すなわち、最も大きな尺度に対して、果断であっただろうということを、この滑稽な光景を目撃するであろう。』

それは、予言の言葉であった。その理由は、テラティニィが、知らせた、問題は、正確に生じた。統一戦線は、少しも適用されることに成功しなかった、そして有意に、人々は、『統一戦線が、理解されなかった』、悲嘆の合唱を聞いた。一般的に言って、もしもわれわれが、代表たちが言う問題を信じる義務があるならば、戦闘的な下部組織は、それらの歴史

的な固有な感情に衝突した、諸提案を受け入れるように拒否した。イメージは、変形されない。共産党の記録作者たちの文献は、このテーマについて一致する。すなわち、それは、正確で、複雑さもなく、コミンテルンの命令を越えて、何がそれらの革命のイメージであるかと叙述する、そして、コミンテルン執行委員会の最初の拡大大会の代表たちによって、提出された叙述に完全に調和する、参考資料である。

この型の状況の繰り返し、指導部の決定に下部組織の明白な服従（他のケースの間、単にその一つのケースである、統一戦線のケースのような）は、漸進的に、指導部が、戦闘的な下部組織の抑制を取り戻すことはできた、そして結果として、ソヴィエト対外政策の諸利害のために及び国民的な革命的な伝統を犠牲にして、一〇月革命及びボルシェヴィキたちによって構造化された、起源の急進主義を条件づけることはできた、急いだ解釈を許した—それは、例えば、フランスの労働運動の伝統において、精神的なショックを与える及び粗暴な断絶として、共産主義運動の出現を考える、アニー＝クリエジェルの推論である。出し抜けのない、他の推理は、『挿入』として、共産主義運動の長い間隔として、統一された諸計画を拒絶することでまったく忙しい、共産主義運動の一種の恢復期として、しかし、それまでのいきさつが、一九二一年でコミンテルン第三回大会で提案された、統一戦線のレーニン主義的な公式化である、諸人民戦線のスローガンの公式化のお陰で、統一されたその仮定の伝統を発見するであろう、この時期を定義することに存する。同様に、コミンテルンの指導する諸グループにおいて、同盟の支持者たちと敵対者たちが、共存した、その代わりに、その急進的な起源によってマークされた、戦闘的な下部組織が、その政治的文化の中で、ミリタンたちを、ミリタンたちの習慣的な異議を申し立てる最後の逃げ場から及び専ら扇動者の実践から、しかし、ヨーロッパ諸国の大部分の中で、ミリタンたちが持った、そんなに動員に関する実践から遠くに離しながら、政治的行動及び国民的生活の中で、ミリタンたちの約束を優遇した、反ファシズムの動員の出現まで、真の及び正式の同盟の戦略を決して取得しなかったし、受け入れなかったことは、確信している。

形作られた、新しい左翼と一緒に、共産党の闘士的活動の緊密な結び付きは、違った及び真に新しい政治的様式の最初の資本を構成した。それは、共産党のミリタンたちが、日々のミリタンたちの闘士的活動において、ミリタンたちの政治的諸関係において、そして、ミリタンたちの判断において、変化は、現実に生じたということを、見分ける問題に貢献した。もしもこんな風なのであったならば、なぜ、ヨーロッパで全体主義の増大する動向に直面して、現われた、反ファシズム運動の存在は、逆に、反ファシズムの自然発生的諸同盟の諸提案にくっついた、ミリタンたちとシンパたちの多数派にあっては、消極的な反応で挑発しなかったと、説明することは、困難であるだろう。すなわち、前線民衆主義の精神状態は、いやいやながら、共産党員たちによって、食物を与えられていなかった。すなわち、反対に、その精神状態は、当然及びうるさい断絶もなく、下部組織を染み込んだ。コミンテルンのある部門によって、鼓舞された宣伝の重要な基本要素があったことは、確信している。すなわち、ライプツィヒの裁判の諸局面、ディミトロフの信じられない伝言の内容、多くの指導者たちをとまどわせた、最初の反ファシズムの神話を創作しながら、初めは、ヴィリィ=ミュツェンベルグは推進した、キャンペーン。すなわち、すべてそれは、時間のため、実に一九二一年の諸提案と違わなかった、諸提案の前に、都合よく反応した、反ファシズムの意見によって及び共産党のミリタンたちによって迎えられた。確かに、他の諸事件は、国際的反ファシズムの意見に影響をもたらした。全体主義的な諸計画に反対して、オーストリアの、フランスの及びスペインの暴動は、その前に想像ができない及び多数の、実際的な有効な援助によってより、もっと多く宣伝の連帯の効果によって重要な、連帯を突如開始した。例えば、特にフランスで（出版の自由は存在した、唯一の諸国の一つ）、スペイン国家の色々な場所で、一九三四年一〇月の蜂起の仕返しの犠牲者たちと連帯して計画的に行動した、キャンペーンは、来るべき数年において、この新しい左翼の多数派を定義しようとした、前線民衆主義の成文を公表する。

それは、これらの兆しが、ソ連邦の防衛の戦略の徴候の下に、持つことはできた、新しい傾向と重要性として、反ファシズム運動のこれらの最初の兆しであった。第三インタナショナルの誕生の時、一九一九年で現われた運動の諸原則と一

緒に、共産党の指導者たちは、理論化する及び蓄積するように努力したということは、その通りである。コミンテルン第七回大会は、この努力の綜合であったし、公式の決まり文句、すなわち、人民戦線を実現するため、コミンテルンの指導者たちの諸条件を構成しなければならなかった、基本要素の理論化であった。そして、もしも大会の詳細な分析が、コミンテルンの計画と関係して深い変化がでなかったことを、証明するならば、大会の限界は、前線民衆主義の発展が、共産党員たちに対して与えた、経験によって追い抜かれた。そして、それは、両大戦間のヨーロッパの政治的諸運動の利害が、諸共産党の、社会民主主義の諸組織のあるいは国際的諸機関の適切なあるいは常軌を逸した諸スローガンに根拠を置かない、しかし、運動が、各国民において、国際的左翼の政治的文化に対して供給した、各国において及び貢献において、過程の特性の中に、諸スローガンに根拠を置くということを、信ずるようないい理由がある。すなわち、そのように、実際には、前線民衆主義が定着した—カタロニアのように—、諸国において、共産党の影響力が、共産党員たちが人民戦線の現実の及び物理的に重要な創始者たちであったということを、事実に帰すべきではない、しかし、三〇年代の間、相次いだ、社会的諸闘争及び統一された諸傾向に対して、共産党員たちが供給したことを、全体的な支持によって帰すべきであることを、われわれは、観察する。(一一)

前線民衆主義の経験に参加したミリタンたちは、全部が、その当時、共産主義運動において変えたことは、印象を持っていた。すなわち、さて、最近の研究によれば、コミンテルン第七回大会は、共産党の指導部たちの計画において、少しも主要なものとして変えなかった。この矛盾の説明は、反ファシズムの諸動員の出現にまで、コミンテルン第三回大会に一九二一年で提案された、統一戦線の展望を拒否した、戦闘的な下部組織の発展において、探さねばならなかったであろう。(一二)

——一九九〇・六・三〇、成稿——

（一） Cf. Claudio Natoli, L'analyse du fascisme et la lutte contre la guerre chez G. Dimitrov, in: Cahiers d'histoire de l'institut de recherches marxistes (CHIRM), n° 27 (1987), pp. 38–43, 55.

（二） Cf. Ibid., pp. 43–48, 55, ディミトロフ選集編集委員会編訳『ディミトロフ選集』第二巻、大月書店、一九七二年、一一一二—二一三頁参照。

（三） Cf. Ibid., pp. 48–54, 55–56.『ディミトロフ選集』第二巻、前掲書、二一二三—二一四、二二七、二一七、二一九—二二二、二一六、二二二、二三〇、二三二、二三四、二三五、二三七、二四一、二四六頁参照。

（四） Cf. Ibid., pp. 2, 4.

（五） Cf. Aldo Agosti, Sur les fronts populaires, in: CHIRM, n° 27, p. 34.

（六） アルド・アゴスティ・石堂清倫訳『コミンテルン史』現代史研究所、一九八七年、七五四、七五九、七九一、七九九、八六四頁参照。訳文は、生硬な文章である。

（七） 国際関係研究所訳編『世界経済と国際関係』第八六集冬季号、特集ペレストロイカとスターリニズム、協同産業ＫＫ出版部、一九八九年、一二八頁参照。

（八） 拙著『フランス人民戦線論史序説』法律文化社、一九七七年、二八四—二八六頁参照。

（九） Ｆ・フィルソフ、Ｉ・ヤジボロフスヤカ「スターリンの指示で……ポーランド共産主義者の悲劇」『世界政治』八〇一号、一九八九年一一月下旬号、日本共産党中央委員会、二七—三一頁参照。

（一〇） Cf. Ricard Vignes, Antifascisme, communistes et frontpopulisme, Du discours au dialogue, in: CHIRM, n° 27 (1987), pp. 57–61. 渡辺一夫・鈴木力衛『増補フランス文学案内』岩波書店、二四六—二四七頁参照。

（一一） Cf. Idid., pp. 61–64.

（一二） Cf. Ibid., pp. 2, 4.

付　記

（一） 主要参考外国文献は、Cf. Jacques Droz, Histoire de l'antifascisme en Europe 1923–1939, Ed. La Découverte, Paris, 1985. René Rémond, Notre siècle 1918–1988, tome 6, Histoire de France, Fayard, 1988. Mario Telò, Le New Deal européen, La pensée et la politique sociales-démocrates face à la crise des années trente, Editions de l'Université de Bruxelles, 1988. Robert Soucy, Le fascisme français 1924–1933, PUF, Paris, 1989. Haim Shamir, Economic crisis and French foreign policy 1930–1936, E. J. Brill, Leiden, 1989. Institut Français d'Histoire Sociale, Le Communisme, Catalogue de Livres et Brochures des XIXe et XXe Siècles, K. G. Saur,

München・London・New York・Paris, 1989. Jacques Girault, Benoît Frachon, communiste et syndicaliste, Presses de la Fondation Nationale des Sciences Politiques, Paris, 1989. Le Front populaire, in: CHIRM, Sommaire n° 36, 1989, etc. である。

(二) 筆者は、今年、CRHMSS, Université de Paris I, Bulletin n° 13, 1990 をまだ寄贈されていない。外国で八〇一種、国内で五〇〇種、合計一、三〇一種である。